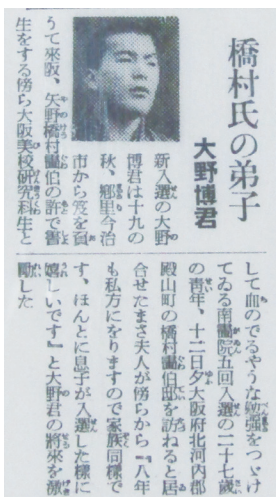




黒部峡谷 絹本墨画 43×48.5cm 1988 年



一服する老人 紙本着色 44×52cm 制作年不詳



清水要樹（しみず・ようき、1909-1999）

明治 42 年三重県生まれ。はじめ出口對石に師事し、昭和 5 年大阪美術学校に入学し矢野橋村のもとで南画を学ぶ。昭和 9 年首席卒業。卒業後は橋村塾「水静会」に入門し、引き続き師の元で腕を磨く。第 12 回日本南画院展「春光」、第 14 回帝展「朝靄」入選。戦後は大阪市立美術研究所、大阪市立工芸高等学校美術科などで講師となる。日展や関西総合美術展などで活躍し、日本南画院の副会長・審査員を務めた。内閣総理大臣賞、文部大臣賞、勲四等瑞宝章などを受賞。アメリカ、スペイン、中国等海外における南画院展に出品し、文化交流にも貢献した。

大野牧牛（おおの・ぼくぎゅう、生没年不詳）

愛媛県今治市生まれ。大阪美術学校第 8 期生、昭和 11 年卒業。矢野橋村の書生となる。昭和 12 年に文展初入選した。枚方市美術協会の呼びかけ人。

◀大阪朝日新聞（昭和 12 年 10 月 13 日付）

文展日本画初入選の喜び・橋村氏の弟子／大野博君
「新入選の大野博君は十九の秋、郷里今治市から笈を負うて来阪、矢野橋村画伯の許で書生をする傍ら大阪美校研究科生として血のどるやうな勉強をつづけている南画院五回入選の二十七歳の青年、十二日夕大阪府北河内郡殿山町の橋村画伯邸を訪ねると居合わせたまさ夫人が傍らから「八年も私方にをりますので家族同様です、ほんとに息子が入選した様に嬉しいです」と大野君の将来を激励した」

生誕 130 年

矢野橋村と弟子展

直原玉青・清水要樹・大野牧牛



2020.2.24—3.8

主催 御殿山生涯学習美術センター

（指定管理者：枚方まなびつながりプロジェクト）



大阪美術学校全景

ます。以後、橋村は南画家・永松春洋に弟子入りし、画家の道に専念します。次第に画壇で頭角を現してきた橋村は、東京や京都に比べ遅れていた大阪の美術教育の発展をめざして、大正 13 年、大阪・天王寺悲田院町に大阪美術学校を設立します。その後、当時の牧野村村長や京阪電車の誘致により御殿山に移転しました。

橋村が描く南画（南宋画）は江戸時代中頃に中国から伝えられました。日本では文人画として大雅・蕪村以来の伝統にあり、技巧や写生よりも精神性を重視し、心で感じた詩的な世界の表現を特徴としています。橋村は写生の技法を取り入れ、日本の風土から生まれる「新南画」と称する新しい南画を目指しました。

橋村の弟子たちもまた師の画風を受け継ぎつつ、独自の展開を見せています。

直原玉青は天王寺校舎の時代に橋村に学びました。後年は日本南画院会長・理事長を務めるなど、現代南画の第一人者として、南画の普及・発展に貢献しました。その画風は東洋・禅の精神から生み出される作品として高く評価されています。清水要樹は山水画を得意とし、墨の濃淡のみで格調高く表現する画風に定評があります。日本南画院副会長などを務め、海外への南画の普及にも貢献しました。

大野牧牛の作品は個人所蔵のため、めったに公開されることのない作品で、当センターでも初めての展示となります。牧牛は書生として橋村の居宅兼美術館「大来館」で寝食を共にしながら師から学びました。27 歳の時に文展に初入選し、当時の新聞に本名・顔写真入りで掲載され（4 頁参照）、新進画家として注目を浴びる存在でした。

本展は小規模ながら、南画の伝統を受け継ぎ近代的な南画を目指した矢野橋村と、師の「新南画」を吸収しつつ、南画をそれぞれに発展させていった三人の弟子たちの作品を展覧する機会となりました。

本展開催にあたり、大野牧牛の貴重な作品出品に快くご協力いただきました後藤治氏に深く感謝申し上げます。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

枚方市御殿山町には昭和 4 年から同 19 年にかけて、大阪美術学校がありました。昭和 62 年に御殿山生涯学習美術センターはその跡地に建てられました。今年は大阪美術学校の創立者・矢野橋村の生誕 130 年にあたります。それを記念した展覧会の一環として、本展「矢野橋村と弟子展」を開催します。

矢野橋村（1890-1965）は愛媛県波止浜、現在の今治市に生まれました。17 歳の時、大阪に出て大阪城近くの陸軍造兵廠に就職しました。勤務中、機械に左手を挟まれ手首を切断する事故に遭遇し



日本画教室



山径画意 絹本着色 43.3×51.3cm 制作年不詳



想望 紙本着色 59×71.2cm 制作年不詳

矢野橋村（やの・きょうそん、1890-1965）

明治 23 年、愛媛県波止浜（現・今治市）生まれ。17 歳の時、大阪に出て砲兵工廠に就職。南画家・永松春洋に師事する。大正 3 年文展初入選、「湖山清暁」で褒賞を受ける。大正 8 年直木三十五、福岡青嵐等とともに、大阪の美術・文化の振興を図るための「主潮社」を結成する。大正 10 年日本南画院を創立、同人となる（昭和 11 年解散）。大正 13 年に天王寺悲田院町に大阪美術学校を創立、校長となった。昭和 3 年帝展出品「暮色蒼々」が特選となり、その後審査員を務める。昭和 4 年大阪美術学校が御殿山に移転。昭和 19 年大阪美術学校が陸軍に接收され、事実上閉校となる。戦後は、大阪市立美術研究所、大阪市立工芸高校で教鞭をとる。昭和 35 年、松林桂月らと日本南画院を再興、副会長となる。同 39 年に日本南画院会長となる。昭和 40 年 4 月 17 日没。享年 76 歳。従五位勲四等瑞宝賞授与。

直原玉青（じきはら・ぎょくせい、1904-2005）

明治 37 年、岡山県赤磐郡（現：赤磐市）生まれ。3 歳の時に淡路島の洲本市に移る。昭和 3 年大阪美術学校卒業。昭和 5 年大阪松坂屋の文化教室の日本画担当講師となる。同 5 年第 11 回帝展「雨逆風襲」入選。昭和 17 年に大阪美術学校の助教授となり後進の指導にあたる。昭和 32 年守口市の自宅に現代南画研究所を設立、翌年には青玲社を主宰し南画の普及に努め、現代南画の第一人者として活躍した。昭和 43 年第 8 回日本南画院展「相忘」文部大臣賞受賞など受賞多数。